

温暖化 高山環境へ影響は？

信大・筑波大中央ア演習林で実験

伊那

「温室」設置 植物の変化調査

中央アルプスの信大農学部でいる。昨年9月、板で囲った「温室」10基を標高約2600以上の地点に設置。1年が経過し、教員や大学院生ら大と筑波大が共同で取り組ん



た。温室内の植物の変化を調査し

実験は、信大、岐阜大、筑波大が日本アルプスなど「中部山岳地域」で気候変動の実態や影響を調べる連携事業の一環で、昨年度から開始。西駒演習林では、信大農、理学部と筑波大菅平高原実験センター（上田市）の

研究グループが共同で進めている。

同センターの田中健助教によると、実験地は亜高山帯から高山帯に移行する場所に当たり、100以上の標高

差でタケカンバなどの高木から低木のハイマツへと植生が大きく変わる。「気候変化が植物の成長や種類に反映されやすい環境で、国内では実験例が少ない」という。

温室は、植物が生える1四方を高さ約2層のポリカーボネート製の板で囲い、温度や湿度の計測器を取り付けた。雨や雪の影響を受けるよう、上部は開放してある。10基のうち5基は、積雪や雪崩の影響を比較するため、冬季は囲いを取り外す。

今回は、木からの落雪でつぶれた1基を除く9基で、

0・5以上の区画に生えている植物の種類、木の太さや伸び具合を調査。38個の温度・湿度計のうち、10個から数値データを回収できたという。

信大農学部付属アルプス圏フィールド科学教育研究センターの小林元・准教授による

と、温室内の温度は外側と比べて最大5度ほど高い。小林准教授は「内側の方が植物の緑が濃く、温室効果が表れている様子。今後、5〜10年かけてデータを集めていくことで、温暖化による高山帯の環境変化の詳細な予測につながる」としている。



「マロニー」にお嫁さん

動物園 18日から一般公開